

「日々の理科」(第 2182 号) 2020, -6, 30

## 「不思議なパプリカ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

私はパプリカが好きだ。パプリカを好きになった原因は、「パプリカ」の歌ではない。若い頃のハンガリー旅行である。



「ブダペスト市内にて」 1991 年 若いですね！

ハンガリーを旅行したのは 1991 年の夏だった。ハンガリーの夏は非常に暑いはずなのだが、この年は異常な冷夏で、常に長袖で過ごしていた。



約一ヶ月の旅行中、ほとんどこの民家に泊めてもらっていた。ここから車で、南部の大平原やバラトン湖方面にも遠出をして楽しんだ。滞在したのは、首都のブダペストよりもずっと南の、ドナウ川沿いの街の郊外である。美しい二階建ての家で、地下室ではワイン

を、庭ではさまざまな花や野菜を作っていた。特にパプリカは、毎朝のように自分で収穫してきて、それをサラダほかの料理にしてもらっていた。今でもパプリカを食べるたびに、あの美しい庭とハンガリー料理を思い出す。

そんなわけで、我が家の冷蔵庫にはパプリカが「必ず」入っている。パプリカがないと、何か心配になってしまう。値動きの激しい野菜の一つで、1 個 200 円以上になることもあれば、70 円で買えることもある。昨日、そのパプリカの 1 つを切ったら、それが「不思議なパプリカ」だった。



私はパプリカを切る時に縦に切らず、「帽子」の部分で輪切りにする。それが一番無駄なく果肉を使えるのだ。すると、パプリカの中に、もう一つ小さなパプリカが入っている。



こんなのはハンガリーでも見たことがない。パプリカ自体も中は空洞だが、子どものパプリカもまた空洞である。これも食べられるのだろうか？